TAD Letter 24

富山県美術館
アート＆デザイン

©Studio Ghibli

金曜ロードショーとジブリ展

2023年10月7日（土）- 2024年1月28日（日）

©Studio Ghibli

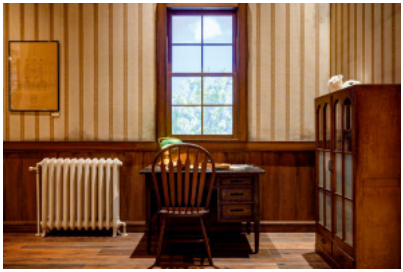
スタジオジブリは、1985年の“スタジオ開き”以来、高畑勲監督や宮﨑駿監督の作品を中心に、数々の名作アニメーションを世に送り出してきました。その作品が広く親しまれ、日本中で愛されるようになった背景には、日本テレビの長寿番組「金曜ロードショー」の存在があります。1986年に『風の谷のナウシカ』が初めて放映されて以来、多くのスタジオジブリ作品が繰り返しテレビで放映され、お茶の間に届けられました。同じ時間に、日本中でたくさんの人が同じ作品を観る、特別な体験。本展では、『風の谷のナウシカ』をはじめ、『となりのトトロ』『魔女の宅急便』『もののけ姫』『千と千尋の神隠し』など、スタジオジブリ作品の魅力を、「金曜ロードショー」で放映された時代の記憶とともにご紹介します。会場では、これまで語られなかった作品の秘密が明かされるほか、作品の世界に飛び込めるようなさまざまな空間が登場します。

開催概要

開館時間　9:30 -18:00（入館は17:30まで）
休 館 日　毎週水曜日（ただし10月11日、1月3日は開館）、12月30日（土）- 1月2日（火）
会　　場　富山県美術館2階　展示室2、3、4
主　　催　富山県、金曜ロードショーとジブリ展富山展実行委員会（富山県美術館、北日本放送、北日本新聞社）
共　　催　日本テレビ
特別協賛　au（KDDI株式会社）
協　　賛　図書印刷
展示協力　ア･ファクトリー
特別協力　スタジオジブリ
観 覧 料　一般1800円、大学生1400円、高校生以下無料

本展は「日時指定予約制」です。事前に日時指定券をご購入の上、ご来場ください。
チケット販売：富山展公式オンラインチケット、ローソンチケット、日テレゼロチケ
※無料対象の方（未就学児を除き）も、富山展公式オンラインチケットで日時指定予約が必要です。
※企画展入場当日に限り、コレクション展もご覧いただけます。
※各種手帳をお持ちの障がい者の方および付添者1名の観覧は無料（日時指定予約は必要）です。
※団体料金の設定や、「リピーター割」「クマ割」等の各種割引はありません。

見どころと出品作品



©Studio Ghibli

POINT

上 “金ロー”とジブリのヒストリーを辿る圧巻のデータベース!

「金曜ロードショー」の放送が始まった1985年は、スタジオジブリが“スタジオ開き”をした年であり、日本テレビが特別番組で『風の谷のナウシカ』を初放送した年です。本展ではそんな1985年を起点に、スタジオジブリ作品の公開年、そして「金曜ロードショー」で初放送された年がどんな時代だったのかを丁寧に振り返りながら、各時代の記憶と記録を通じて映画の魅力に迫ります。

左下 『君たちはどう生きるか』ゾーン

現在公開中の宮崎駿監督の新作『君たちはどう生きるか』ゾーンが富山展で新たに登場します。同作の主題歌「地球儀」のタイトルは、米津玄師さんがドキュメンタリー映像で宮崎監督が地球儀に身近な景色を描き入れている姿を見たことがきっかけだったそう。本展では、宮崎監督が作ったこの地球儀「身近な世界」(三鷹の森ジブリ美術館収蔵)と、主題歌「地球儀」のジャケット画を表現した美術セットを展示します。

右下 ジブリ映画ポスタースタジオ

東京展で好評だったスタジオジブリ作品のポスターの中に飛び込んで、主人公のように撮影できる空間が、富山にも登場します。そこはまるで架空のスタジオに迷い込んだような場所。作品の主人公になった気分で楽しみましょう! 対象作品は『魔女の宅急便』『もののけ姫』『千と千尋の神隠し』『猫の恩返し』『崖の上のポニョ』です。

倉俣史朗のデザイン―記憶のなかの小宇宙

2024年2月17日（土）- 4月7日（日）

ポスタービジュアル Design：永井裕明

倉俣史朗（1934-1991）は、没後30年以上を経た今なお、デザインの領域にとどまらない高い評価を受け、影響を与え続けているデザイナーです。アクリル、ガラスのほか、建築用金属素材も用いて主に家具と店舗等のインテリアを中心に展開されたその仕事は、時に同時代の美術の影響を受け、また社会状況への問いかけもはらみながら生まれた、唯一無二のデザインとして今なお人々を魅了しています。

例えば、当館所蔵の椅子《ミス・ブランチ》（1988年）や《シング・シング・シング》（1985年）を当館のデザイン・コレクション展示室で目にした時、座り易さといった機能や生産の合理性を考える以前に、見たこともない椅子の造形と佇まいに心を奪われる人は多いのではないでしょうか。倉俣は、椅子が空間の中で人の感覚に作用することも機能なのではと、デザインを通して問い続けてきたのです。

開催3館の企画による本展は、倉俣の名を冠した展覧会としては没後の1995年の国際巡回展、2013年の埼玉県立近代美術館での開催以降、10年ぶりとなるものです。独立以前の20代の頃の仕事を紹介する資料から、56歳で突然世を去るまでに手がけたインテリアや家具を時代順に辿る本展では、内面やその思考の背景による「倉俣史朗自身」を伝えることも試みます。晚年の倉俣が記した夢日記やイメージスケッチ、倉俣自身の言葉に触れることも本展の大きな魅力です。

開催概要

開館時間　9:30 -18:00（入館は17:30まで）
休 館 日　毎週水曜日（3月20日は開館）、3月21日
会　　場　富山県美術館2階　展示室3、4
主　　催　富山県美術館、朝日新聞社、北日本新聞社、富山テレビ放送
特別協力　クラマタデザイン事務所
観 覧 料　一般900円（700円）、大学生450円（350円）、高校生以下無料
※（　）内は20名以上の団体料金

イベント情報

会期中に講演会、担当学芸員によるギャラリートーク等を開催予定です。
詳細は、当館ホームページやSNS等でお知らせします。

見どころと出品作品

左上《シング・シング・シング》1985年 当館蔵 撮影:柳原良平 / 左下 ショップ「スパイラル」1990年 撮影:淺川敏
中央《ピラミッドの家具》1968年 株式会社イシマル蔵 撮影:消忠之 / 右上《光のテーブル》1969年 京都国立近代美術館蔵 撮影:消忠之
右下 スケッチブック「言葉 夢 記憶」より 1980年代 クラマタデザイン事務所蔵 撮影:消忠之 ©Kuramata Design Office

POINT

没後30年以上、今また高まる評価

その活動期にも世界的な評価を受けていた倉俣のデザイン。香港に開館した美術館「M+」が、倉俣史朗がインテリアデザインを手掛けた新橋の寿司店「きよ友」を移設する形で収蔵・公開したことが大きな話題になるなど、近年、倉俣のデザインへの注目がいっそう高まっています。その中で開催される本展は、没後30年以上を経ても今なお色褪せず光を放つ倉俣史朗のデザインに出会うまたとない機会です。

倉俣史朗による家具とインテリアが一堂に

当館をはじめ、アーティゾン美術館等国内美術館の所蔵品、実制作に携わった製作会社所蔵などの家具や資料が一堂に会するまたとない機会です。また、大半が現存しない主要なインテリアの仕事も写真等により紹介します。また、当館のユニフォームのデザインを手掛けた三宅一生は、本展でその一部を紹介する店舗インテリアを倉俣に依頼しています。

もうひとつの倉俣史朗。私的に記した夢日記など

倉俣は何を考え、想い、そのデザインを生み出していったのでしょう。本展では、1980年代以降に私的に書きつけていた夢日記や、同じく1980年代から自身の過去のデザインを自身のイマジネーションの世界に置くように描きはじめたイメージスケッチなども紹介します。また、倉俣所蔵の書籍やレコードの一部も紹介します。

「大竹伸朗展」関連イベント

《ダブ平&ニューシャネル》デモンストレーション

2023年8月5日、9月17日ほか

大竹伸朗が1999年に制作した本展出品作《ダブ平&ニューシャネル》は、ステージとコントロールブースからなる作品です。ステージには4体の機械仕掛けのバンドメンバーがおり、それらをコントロールブースに入った大竹氏本人が操作し、音を会場内に響かせます。
会期中、大竹氏が来館されている際は、当初予定していた時間以外にも可能な限りデモンストレーションを行い、「爆音」とも呼ぶべき大きな音が展示室を震わせました。このデモンストレーションをめがけて来館された方や、偶然に出くわした方が作品を取り囲んで作品の音と動きに釘付けになり、最後には展示室は拍手に包まれるなど熱気を帯びる一幕が度々見られました。

クロージングトークイベント

2023年9月18日 14:00〜
登壇者:大竹伸朗氏、湯浅学氏

最終日のトークイベントでは、音楽評論家の湯浅学氏を聞き手に迎え、大竹氏が10代の頃からメンバーの一人であり、日本の音楽史における特異点の一つといえるバンド「JUKE/19.」の音楽制作秘話や、大竹氏が20代の頃に渡英した際に親交を持った、当時のイギリスの音楽シーンで前衛的な活動をしていたバンドとのエピソード、大竹氏に大きな影響を与えた歌謡曲やアンビエントミュージック、ジャズなどのお話を、ユーモアを交えて語りあいました。

オープンラボ

「くるりんカップシアター」

アニメーションの原理のひとつとなった回転のぞき絵アニメーション「ゾートロープ※」。今回は、紙カップとストローを使って、手作りゾートロープをつくります。カップの隙間をのぞくとあなたが描いたイラストが動いて見えるかも!?

※ゾートロープとは?

円筒の内側にパラパラ漫画のような連続した動作の絵が貼ってあり、回転させたカップの隙間から覗くと絵が動いて見える回転アニメーション。

開催概要

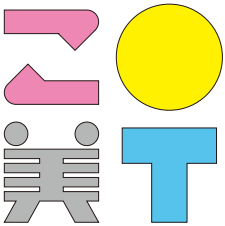
開催期間　2023年9月21日(木)-2024年1月30日(火)
活動時間　10:00-12:00／14:00-16:00
会　　場　3階ラボ(アトリエ内)
定　　員　24名 ※1テーブルにつき4名まで
対　　象　こども~大人までどなたでも

※都合により、おやすみする場合があります。あらかじめご了承ください。

イベント

《まるごとTADこども美術館》

2023年10月7日(土) - 2024年1月28日(日)



EVENT 1

教育企画展「START☆2023」

学校(School)×富山(Toyama)×アート(ART)="START"。
富山県美術館では、子どもたちが主役「STAR☆」の展覧会を開催します。
富山県内の小学校、中学校、支援学校から集まった個性あふれる作品を展示します。

会　　期　2023年12月9日(土)-2024年1月28日(日)
会　　場　1階TADギャラリー、館内各所

EVENT 2

クイズラリー「めざせ! TADマスター」

コレクション展に関するクイズや「START☆2023」参加校が考えたクイズに挑戦してTADマスターを目指そう! 景品もあるよ!

実施期間　2023年10月7日(土)-2024年1月28日(日)
クイズシート配布場所
1階:総合受付前、2階:展示室1入口、3階:展示室5入口・ラボ

EVENT 3

ちいさな子どもたちのための「ひよこツアー」

小学校にあがる前の子どもと、その家族のためのプログラムです。
美術作品をみる練習をしたあとにアトリエで造形あそびに取り組みます。

開 催 日　2023年12月18日(月)、19日(火)2~3歳向け
12月21日(木)、22日(金) 4~5歳向け
各回10:00~(約90分を予定) ※前号に掲載の日程から変更となりました。
場　　所　3階アトリエ　定員各回6組12名／要事前申込　参加無料

【申込方法】富山県美術館に電話にて事前申込(申込多数の場合は抽選)
申込受付期間:12月1日(金)-12月8日(金) 9:30-18:00(休館日は除く)
※大人の方は、当日有効のコレクション展観覧券(300円)が必要です。
事前にお買い求めください。

瀧口修造コレクションより

《初年兵哀歌（ぐにゃぐにゃとした太陽がのぼる）》浜田知明

1952年　紙・エッチング　8.9×17.6cm

TAD Letter 11（2020年9月発行）の「コレクション紹介」コーナーに「瀧口修造コレクション」を紹介する一文を書いた。副館長を辞すタイミングだったので、これをもって最後との思いで書いた。ところが、である。広報担当から、2023年度のどこかで書いて欲しいとの依頼を受けた。在籍とはこういうことかと観念しての再登板である。お許しいただきたい。とはいえ、今さら作品解説も芸がないので、昔語り調で書こうと思う。

富山近美時代の2000年に開催した「金山康喜 青のリリシズム」展の準備中に、金山の妹さんから聞いたことだが、「かなやま・やすき」と皆さんは呼んでいるが、本当は「かなやま・こうき」。家族からは「こうちゃん」と呼ばれていたという。ならば、どうして「やすき」なのか？妹さんも分からないという。なぜ「こうき」を「やすき」にしたのか、と思いを巡らしている時、ふと、浜田知明さんとの会話を思い出した。1996年に「浜田知明の全容」展を開催した際に、どうして「ちめい」と名乗るようになったのか、とご本人に尋ねていたのだ。

1944年に結婚し、夫人方の姓を名乗り浜田知明となるが、旧姓は高田知明（たかた・ともあき）。ローマ字でサインすると、姓と名ともにイニシャルが「T」となる。何ともしっくりこない。そこで「ちめい」にしたのだという。この話には続きがあって、結婚して浜田姓になるのが分かっていれば、「ちめい」にする必要はなかったかもしれないですね、とにこやかに笑っておられた表情がなつかしい。話の後半部分は浜田さん流のユーモアだが、前半のサインのくだりについては、事の成り行きを物語っていそうな作品が残されている。16歳時のデッサン2枚である。

1枚が《石膏デッサン（モリエール像）》で、左上に「1934.3.8／No.20／ともあき」と記されている。東京美術学校受験準備のために上京し本郷絵画研究所で描いたデッサンである。もう1枚が《石膏デッサン（ヘルメス像）》で、同じく左上に「1934.11.10／Chimei.T」とある。1934年4月に東京美術学校油画科予科に入学しているので、美校生時代のデッサンだ。「ちめい」にまつわる話は、どうやらこの頃のことなのだろう※1。早いもので浜田知明さんがお亡くなりになって、もう5年が経ってしまった。

金山康喜（かなやま・こうき）の場合も、姓と名ともにイニシャルが「K」だ。1951年にパリに留学してローマ字でサインする機会が増えただろう。そのタイミングで、浜田さんと似たような違和感から「Yasuki」に変えたのだろうか。あいにくパリ時代の作品のサインは「Kanayama」としかない。留学前は作品にサインを入れることは稀で、サインが入っていてもやはり「Kanayama」である。ともあれ、フランスのアンデパンダン会員証のファーストネーム欄には「Yasuki」とある。自署だ。本人が「やすき」と名乗っていたのは間違いない。そういえば1958年に初めて渡欧した瀧口修造の滞欧備忘録※2 7月13日（パリ滞在）の頁に「Hamaguchiのアパートへ地下鉄で行く.Y. Kanayamaに会う」と記していたな、等々、様々な資料に思いが及ぶにしても、「では、どうして変えたのか」という、長年の個人的な疑問は今もって宙ぶらりんのままだ。

（富山県美術館アドバイザー／砺波市美術館長　杉野 秀樹）

※1 デッサン2枚の図版は、熊本県立美術館編「戦後70年記念 浜田知明のすべて」図録（2015年）11頁に掲載されている。また熊本県立美術館の山中理彩子学芸員から貴重な情報をご提供いただいた。ここに感謝申し上げる。 ※2 滞欧備忘録は、慶應義塾大学アート・センター瀧口修造アーカイヴ所蔵である。

富山県美術館（TAD）
〒930-0806 富山県富山市木場町3−20（富岩運河環水公園内）　tel.076-431-2711　fax.076-431-2712　https://tad-toyama.jp/

2023年11月発行